

研究成果報告(要旨)

2023年7月

人と関わるのが難しかった高齢者との音楽療法
ー音楽を媒(なかだち)としたケアとライフストーリーへのアプローチー

指導 中谷 陽明 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
老年学学位プログラム
221J5904
布施葉子

Research Paper(Abstract)

July 2023

Music Therapy with an Older Woman
Who Had Difficulties in Communicating with Others:
A Music-Based Approach for Caring and Her Life Stories

Yoko Fuse

221J5904

Master of Arts Program in Gerontology
International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Research Paper Supervisor: Yomei Nakatani

目次

はじめに	1
第1章 高齢者に対する音楽療法	1
1.1 日本における音楽療法と音楽療法士	1
1.2 認知症高齢者に対する音楽療法について	3
1.3 なじみの音楽について	4
1.4 研究目的	5
第2章 研究方法	5
2.1 音楽療法の対象者について	5
2.2 インタビューの対象者について	6
2.3 調査方法	6
2.4 分析方法	7
2.5 倫理的配慮	7
第3章 分析	7
3.1 Aさんの音楽療法の実施プロセス	8
3-1-0 開始までの経緯	8
3.1-1 オンライン音楽療法	9
3.1-2 対面音楽療法	13
3.1-3 補足	19
3.2 Aさんとアクティビティ担当介護福祉士と音楽療法士と《英雄ポロネーズ》	20
3.2-1 Aさんの《英雄ポロネーズ》鑑賞の様相	20
3.2-2 アクティビティ担当介護福祉士と《英雄ポロネーズ》	21
3.2-3 音楽療法士と《英雄ポロネーズ》	23
3.2-4 《英雄ポロネーズ》で、関わる	25
3.3 音楽以外の言葉	29
3.3-1 髪	29

3.3-2	音楽療法士の体調を気遣う言葉	3 1
3.4	Aさんのライフストーリー	3 2
3.4-1	住宅型有料老人ホームからケア付き当施設へ	3 2
3.4-2	食べること	3 4
3.4-3	J学校	3 5
3.4-4	Aさんと精神疾患	3 6
3.4-5	音楽とAさん	3 8
3.5	Aさんに関わる様々な人たちからみたAさんと音楽療法	4 0
3.5-1	ケアマネジャーからみた音楽療法	4 0
3.5-1a	第一印象	4 0
3.5-1b	生活歴を知る	4 1
3.5-1c	「音楽療法にもいろいろあるんだなあ」	4 3
3.5-1d	看取り	4 4
3.5-1e	双方向	4 5
3.5-2	介護福祉士と介護長からみた音楽療法	4 5
3.5-2a	情報源	4 6
3.5-2b	悪いイメージがない媒体	4 6
3.5-2c	個別ケア	4 7
3.5-2d	気分転換	4 7
3.5-3	アクティビティ担当介護福祉士からみた音楽療法	4 8
3.5-3a	マッチング	4 8
3.5-3b	満たす	4 9
3.5-3c	積み重ね	5 0
3.5-3d	「精神薬」	5 1
3.5-4	家族からみた音楽療法	5 2
3.5-4a	入居前と入居後	5 2

3.5-4b 知っていたことと言えたこと	5 4
3.5-4c 新しいAさん	5 4
第4章 考察	5 5
4.1 Aさんの音楽療法	5 5
4.1-1 確かな安心感	5 5
4.1-2 更新－関わりの変化－	5 6
4.1-3 垣間見えるライフストーリー	5 7
4.2 音楽療法とは何か	5 8
4.2-1 どこからどこまでが音楽療法か－オンラインでの関わりの可能性－	5 8
4.2-2 『その人らしさ』の探求	6 0
4.2-3 媒の音楽	6 1
おわりに	6 2
謝辞	6 4
引用文献	
資料	

1. 研究背景と目的

音楽療法の、場所を限定せず、幅広い人数設定が可能な療法であり、人間の身近な存在である音楽を用いて侵襲を伴わず、難しい手法もなく、対象者も年齢や人数、疾患を問わずに簡便に取り入れることができる [千葉 林, 2022]。高齢者を対象とした報告によれば、病院では6割以上、特養・老人デイサービスでは全ての施設で音楽を使った何らかの活動が実施されている [丸山, 2019]。実施する者が音楽療法士かどうかに関わらず、『なじみの音楽（その対象者にとってなじみ深い音楽を意味し、対象者が聴き慣れた音楽、あるいは大切にしてきた音楽）』がひとつの重要な音楽療法のキーになるという見解もある [坂下, 『なじみの音楽』が認知症高齢者に及ぼす改善効果—ナラティブを考慮した介入について—, 2008]。

本稿は、人と関わるのが難しかった高齢者（以下、Aさん）との53回にわたる音楽療法の研究報告である。この事例は、COVID-19感染拡大のさなかに、ケア付き有料老人ホームと音楽療法士がオンラインで繋がる形式により開始された。38回目以降、感染対策の緩和により、対面形式に切り替わった。しかし、いずれの形式であっても、プロセスを通じて、ある音楽がAさんと関係者との「媒（なかだち）」となっていた。対象者との音楽療法のプロセスの分析・調査に加え、関係者へのインタビュー調査を実施し、本事例で何が起きているのかを探索し、音楽療法とは何かということについて何らかの知見を見出すことを目的とする。

2. 研究方法

オンラインおよび対面によるAさんとの1回30分×53回の音楽療法のセッション記録（文書による実施記録、音楽療法の録音・録画）をデータとして扱う。全データは、実施内容・Aさんを中心としたコミュニケーション・Aさんの身体の動き・音楽療法士の内面・アクティビティ担当介護福祉士の言動や記録書き込み・生活面の情報とに分類し、時系列にプロセスを追って調査・分析する。

Aさんに関わりのある6名（ケアマネジャー、介護福祉士、介護長、前施設元職員、アクティビティ担当介護福祉士、息子）に、60分程度の半構造化インタビューを行う。半構造化イン

タビュー内容は、先方の了承を得て、録音し、逐語録を作成する。インタビューガイドは①家族から見た A さんについて、②A さんの現施設に入居する前の様子、③現施設の入居当初の様子、④生活面での様子や変化、⑤A さんの音楽療法についてどう感じるかの 5 項目で、これらの逐語データを何度も読み、分析・調査する。

3. 結果

53 回の音楽療法のプロセスは変化に応じて分類して、タイトルをつけた。第 1 期 (#1-4) デイルームでクラシックが好きな一参加者としての A さん、第 2 期 (#5-9) 個人音楽療法開始と《英雄ポロネーズ》のリクエスト、第 3 期 (#10-16) 英雄ポロネーズに固執してしまう事に対する音楽療法士の葛藤と挑戦、第 4 期 (#17-21) A さんの転倒により復活した英雄ポロネーズ、第 5 期 (#22-25) ショパンばかりの選曲、第 6 期 (#26-30) 英雄ポロネーズと A さんの関係にスポットを充てていく、第 7 期 (#31-37) 好きな曲は何かを問い、A さんが応える、第 8 期 (#38-40) オンラインから対面へ、第 9 期 (#41-44) 英雄ポロネーズで始まるセッションと、A さんの長い語り、第 10 期 (#45-47) 音楽療法士の体調を気遣う、第 11 期 (#48-50) 「歌いたいわあ」「会いたいわあ」「泣けてくる」、第 12 期 (#51-53) 豊かな言葉や笑い声、の 12 段階である。また、インタビューデータから、《英雄ポロネーズ》との関係、A さんのライフストーリー、音楽以外の要素を抽出し、さらに他職種と家族から見た音楽療法を調査した。

4. 考察

本稿では、本事例の音楽療法で何が起こっていたか、と、音楽療法とは何かということについて考察した。対象者にとっての《英雄ポロネーズ》は、音楽療法の場に「確かな安心感」をもたらし、これまで隠れていた対象者のライフストーリーを垣間見せる契機となった。また、対象者や音楽療法士に「新しい試みを行うために必要な安全な拠り所」となり、次への試みへのステップとなった [ケニー, 2006]。対象者の『その人らしさ』は更新され、対象者と間接的に関わる人にとっても、対象者との関わりに何らかの変化や影響が見られた。

音楽療法とは「音楽療法士が」「何かを」「した」「結果どうなったか」というものではなく、COVID-19 感染拡大の中オンライン形式で開始された実践、直接的・間接的要素など含め、プロセス全体が関係する場としての音楽療法と考えられる。更に、【媒の音楽】が対象者との生き生きとした関係を支えるという知見を得た。さらに、対象者の『その人らしさ』に出会うための多様な可能性に開かれた場として、音楽療法が今後どのように貢献できるかという課題も見出した。

引用文献

- Arthur Rubinstein Plays Chopin and Rachmaninov (日付不明). [映画]. Video Artists International.
- Bruscia, K. E. (2018). *The Enduring Concepts of Carolyn Kenny*. *Voices* vol.18 No.3.
- Kenny, C. (2015). *The Field Of Play A Focus on the Ecology of Being and Playing*. The Oxford Handbook of Music Therapy Jane Edwards(ed.).
- Promoting well-being. (日付不明). 参照先: World Health Organization: <https://www.who.int/activities/promoting-well-being>
- ケニーキャロライン.(2006). フィールド・オブ・プレイ 音楽療法の「体験の場」で起こっていること.(近藤里美 訳, 編) 株式会社 春秋社.
- ダン・コーエン (監督).(2014). パーソナル・ソング [映画]. アメリカ合衆国.
- デンジン KN.(1992). エピファニーの社会学 解釈的相互作用論の核心.(関西現象学的社会学研究会－編訳 片桐雅隆 訳者代表, 編) マグロウヒル出版株式会社.
- ブルシア E ケネス.(2001). 音楽療法を定義する.(生野里花 訳, 編) 東海大学出版会.
- リクルート.(日付不明). スタディサプリ: 大学・短期大学・専門学校の進学情報サイト. 参照日: 2023年1月, 参照先: <https://shingakunet.com/bunnya/w0034/x0458/#:~>
- 丸山ひろ子.(2019). 保健福祉サービスにおける音楽活動の現状と音楽療法普及の可能性—保健福祉サービス事業者へのアンケート調査に基づく考察—. 音楽心理学音楽療法研究年報 48,48-55.
- 高橋多喜子.(2016). 認知症と音楽療法. 成人病と生活習慣病 46(2),218-221.
- 坂下正幸.(2007). 音楽療法における専門性と資格化をめぐる言説. *Core Ethics: コア・エシックス* 3 165-181,.
- 坂下正幸.(2008). 『なじみの音楽』が認知症高齢者に及ぼす改善効果—ナラティブを考慮した介入について—. 立命館人間科学研究 第 16 号.
- 松原由美.(2011). 音楽が認知症高齢者に及ぼす QOL の向上～回想法となじみの音楽を用いての実践～. 九州保健福祉大学研究紀要 12:79~84.
- 上野千鶴子.(2011). ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ. 株式会社 太田出版.
- 菅野幸恵.(2007). 固定化された関係を越えて. 著: 宮内洋, 今尾真弓, あなたは当事者ではない—〈当事者〉をめぐる質的心理学研究— (ページ: 18-27). 2007.
- 生野里花.(2001). 訳者まえがき. 著: ブルシア E ケネス, 音楽療法を定義する. 東海大学出版社.
- 生野里花.(2005). 日本における音楽療法の現状と展望. *Voices* vol.5,no1,. 参照先: <https://doi.org/10.15845/voices.v5i1>
- 生野里花.(2020). 介護つき高齢者ホームにおける音楽療法「街角の音楽家」—その共創の様相

第2報－ 共創学会.

生野里花. (2020). 介護付き居住施設の日常から終末期までの生活に、音楽療法をどう活用するか. 認知症ケア事例ジャーナル, 第13巻, 第3号.

生野里花. (2021). 出勤できない音楽療法の臨床現場で経験したことと、そこから考えたこと－音楽療法は COVID-19 禍でどう変わるのか－. 日本音楽療法学会誌, 21(1), 29-40.

千葉桂子, 林ゆう. (2022). 認知症高齢者に対する音楽療法の効果に関する文献検討. 東北文化学園大学 看護学科 紀要 第11巻 第1号 2022年3月 .

川英友. (2013). 「自らを語り得ぬ人々」からの「当事者概念」の考察. 静岡英和学院大学紀要 第11号. 静岡英和学院大学.

藤巻佑惟, 小田嶋裕輝. (2020). 日本の看護研究における音楽療法についての文献検討. 日本看護医療学会雑誌 22(1), 64- 75.

日本音楽療法学会. (日付不明). 日本音楽療法学会. 参照日: 2023年1月, 参照先: <https://www.jmta.jp>

日本音楽療法学会関東支部. (日付不明). 日本音楽療法学会関東支部パンフレット . 参照日: 2023年1月, 参照先: <http://www.jmta-kanto.jp/pamphlet.pdf>

日本緩和医療学会. (2016). がんの補完代替療法クリニカル・エビデンス. 金原出版、東京、92, 2.

齋藤里果. (2006). 音楽療法の紹介. 理学療法科学 21(4).